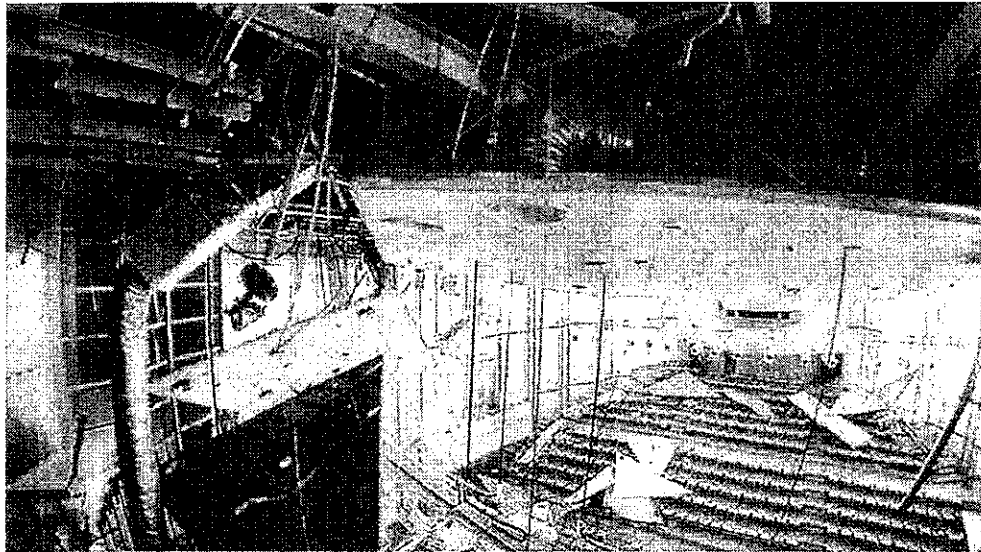


## 宮城県沖地震44年 進めぬ耐震化 被害相次ぐ

2022年6月12日 15:00 | 2022年6月13日 12:29 更新

28人が犠牲となった1978年6月の宮城県沖地震は12日、発生から44年となった。東日本大震災以降も大きな地震が相次ぐ中、今年3月に宮城、福島両県で最大震度6強を観測した地震では、大型ホールの天井板落下や断水といった被害が目立った。12日は「みやぎ県民防災の日」。改めて人命や生活を守る備えを確かめたい。



客席の広い範囲に天井の部材が落ちた白石市ホワイトキューブのコンサートホール= 3月31日 (市提供)

### 仙台市体育館、ホワイトキューブ、大型ホールで天井落下 コスト増で復旧足踏み

宮城県沖地震を受け1981年に導入された新耐震基準に伴い、建物本体の耐震化が進んだ一方、天井などの非構造部材の耐震対策は遅れている。2011年の東日本大震災では音楽ホールなど大型文化施設の天井が落下。今年3月16日の福島県沖を震源とする地震でも学校体育館などで同様の被害が相次いだ。

2畳ほどの大きな板が客席のあちこちに覆いかぶさっている。3月の地震で天井部材が落下した白石市ホワイトキューブのコンサートホール。地震から3カ月がたった今も被災直後の惨状をさらす。

落下した部材は1片だけで約230キロもあった。市の委託で現地調査した日本耐震天井施工協同組合(東京)の塩入徹技術委員長は「地震発生が人がいない夜間でよかった」と話す。

復旧工事が始まらないのは多額の費用負担がネックとなっているからだ。市まちづくり推進課の担当者は「音響を重視した造りになっており、復旧の工法で費用は大きく変わる。天井の耐震化も含めた改修が必要だが、市の予算だけで賄うのは難しく、国の支援次第になる」と悩ましい状況を打ち明ける。